

機能別分団「OB分団」の紹介（長野県伊那市）

防災課

1. はじめに

消防団は、地域防災の中核的存在として、地域の安心・安全のため献身的に活動していますが、近年の社会環境等の変化に伴い、消防団員数の減少、被雇用者化や高齢化等の様々な課題に直面しています。

こうした中、各地の消防団では、消防団員確保のための取り組みが積極的に行われており、今回は平成18年7月豪雨で被害を受けた長野県から、当災害でも活躍した伊那市の機能別分団「OB分団」を紹介します。

2. OB分団の概要

平成18年3月31日の伊那市、高遠町、長谷村の合併に伴い、新たに発足した伊那市消防団は、従前の3団（伊那市消防団、高遠町消防団、長谷村消防団）の定数をそのまま引き継ぎ、団長以下定数1,156名の組織となりました。しかし、合併前の実員数の合計は1,129名と27名の乖離があり、また、合併の際、退団希望者が多く出ましたので、この不足する消防団員を確保するため、旧長谷村の消防団員OB17名を構成員とし、旧村内の建物火災や大規模災害に限って出動する「長谷機能分団（通称：OB分団）」を採用しました。

また、旧伊那市消防団への任意の協力団体としてプラスバンドがあり、消防団と連携して広報活動を行ってきましたが、OB分団の採用と併せて、広報・PR・啓蒙活動を任務とする機能別分団「消防音楽隊」として30名を新たに採用しました。

OB分団は、ポンプ車や小型ポンプなど分団専用の資機材を持ちませんが、団員には、活動服、ヘルメット、安全靴などが一般の団員と同じように貸与され、報酬、出動手当も同じ基準で支給されます。

3. OB分団採用の背景

OB分団が出動する旧長谷村は、人口約2,200人の過疎の村で、常備消防が置かれず、住民の119番通報も役場の一般職員が交代で受け、消防団長に連絡をとるような体制でした。しかし、合併に際して、119番通報は伊那消防組合高遠消防署が受信し、直ちに常備の消防隊が出動すると同時に、消防団に



平成18年7月豪雨による被害状況（伊那市内）

出動を指令する体制が整い、地域の消防力は飛躍的に強化されました。

しかしながら、この地域は、静岡・山梨の2県に接する広大な山岳地帯であり、奥深い沢筋に小規模集落が点在するという火災防ぎよに不利な条件を持つため、常備の消防体制が整ったとはいえ、まだまだ消防団の活動に頼らざるを得ない部分もあります。

そこで、不足する消防団員を補完する戦力として白羽の矢が立ったのが、消防団OBの皆さんでした。

4. OB分団の任務と期待

OB分団員は、各種訓練やポンプ操法大会などには参加しませんが、地域内で災害が発生した場合には、第1出動隊として災害現場に駆けつけます。17名のOB分団員は、いずれも20年以上の消防団活動の実績があり、多くは、分団長、部長などの幹部経験者で、地域の実情に精通しているだけでなく、社会的・年齢的にも地域の中心的なリーダーとして活躍する40歳代から50歳代の方々です。17名と少数ではありますが、火災などの災害が発生した場合、迅速に災害現場に駆けつけ、経験豊かなリーダーとして活躍するOB分団員に対し、地域住民からは安心感と高い期待が寄せられています。

伊那市では先の梅雨前線による大雨により、地域住民に「避難指示」が出される非常事態となるなど、大きな被害が発生しました。このような中、常備消防、消防団ともに、文字通り昼夜兼行の活動となりましたが、経験を活かしたOB分団員の活躍は目を見張るものがあり、地域に大きく貢献しました。

5. むすびに

社会構造の変化や少子高齢化により、今後、地域によっては消防団員を確保することが益々困難となることが考えられます。すべての消防団活動に参加する基本団員を確保することが地域の防災力向上のためには重要ですが、それが困難な場合で地域の実情が許せば、伊那市のような取組みを参考にベテランOB団員を機能別団員・分団として採用することも、地域の安心・安全につながります。



土のう詰めをする消防団員（伊那市消防団）